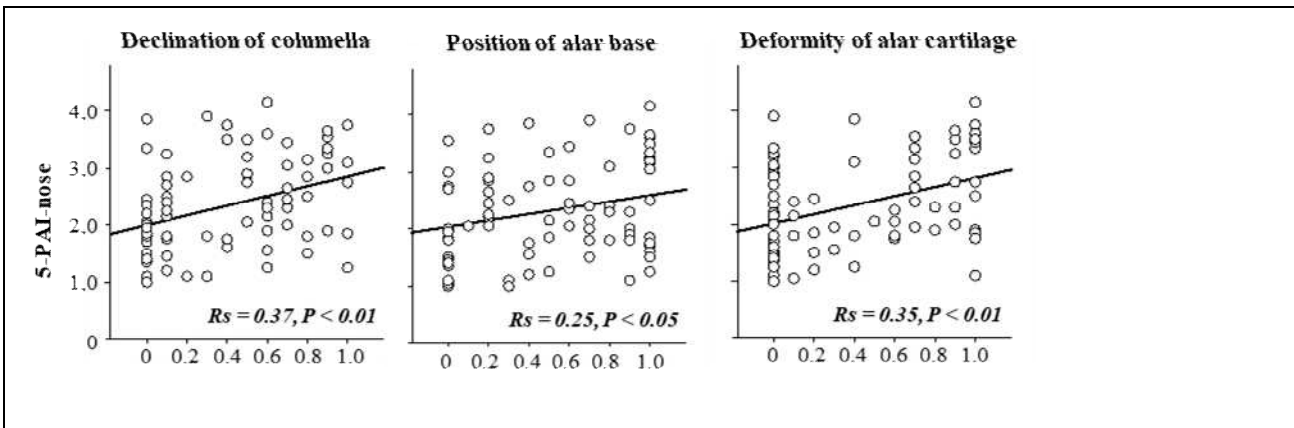


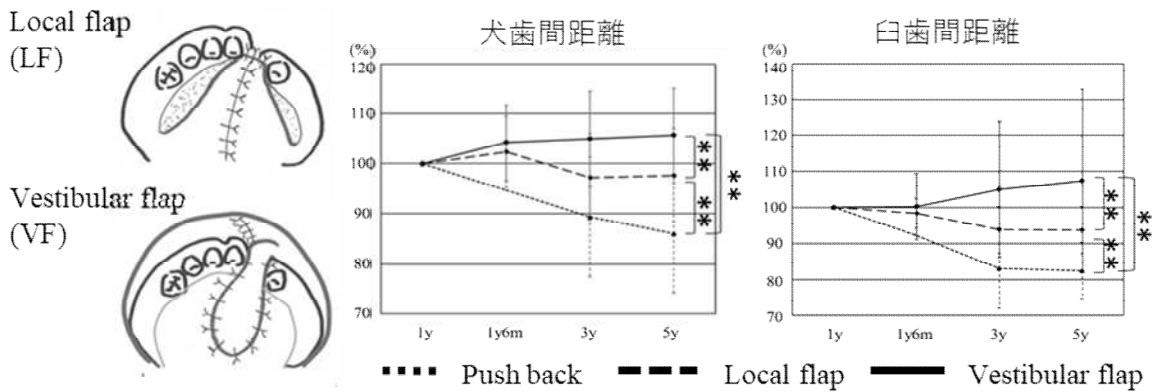
令和3年度 臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：口腔外科1（制御系）
第3期中期目標・中期計画期間中の臨床研究テーマについて該当するものにチェックを入れてください。（塗りつぶし可）
<input checked="" type="checkbox"/> 1. 口腔領域における新規組織再生・再建法の開発 <input type="checkbox"/> 2. 高齢者の特性に配慮した口腔疾患の予防法・診断法・治療法の開発 <input type="checkbox"/> 3. 顎口腔機能の維持増進に関する研究 <input type="checkbox"/> 4. 歯科医学臨床教育の質保証に関する研究 <input type="checkbox"/> 5. その他
研究期間：2017年8月22日～2022年3月31日
研究課題名：成長評価による口唇裂口蓋裂治療の検討
<p>研究課題の概要及び成果：口唇裂口蓋裂治療では、口唇外鼻形態の回復、正常な鼻咽腔機能の獲得を目的に乳幼児期に複数回の手術治療を必要とする。その一方で、手術侵襲に伴い創傷部に形成される瘢痕組織は、口唇外鼻や上顎骨の成長発育を抑制することで、経年的に二次的醜形や術後鼻咽腔機能不全、上顎劣成長に伴う咬合不全、中顔面の形態異常をきたす場合も少なくない。そこで、より低侵襲な手術方法の開発ならびに術前の被裂形態、変形の程度に合わせたより適切な術式を選択あるいは術式の改良を検討するために、指標となり得る形態的予後予測因子の解明が重要となる。本研究より、1. 片側性唇裂に対する口唇形成術術前と術後（就学前）のデジタル顔貌写真を用いて、Americleft, Eurocleftで提唱されている顔貌形態評価に関わる Index を改変して、口唇裂一次手術後の口唇外鼻形態の対称性に影響する要因について検討を行ったところ、術前の鼻柱傾斜度ならびに裂側鼻翼軟骨の変形度が、術後（就学前）口唇外鼻形態の対称性に有意に関わっていることが明らかとなった(Tanaka S et al. 2021)。また、2. 硬口蓋閉鎖前と閉鎖後（就学前）の顎模型を用いて、従来のI期的手術法(Push-back法)、II期的手術法(Furlow法+palatal local flap法)、ならびにII期的手術改良法(Furlow法+vestibular flap法)の三群間で術後の顎発育を比較検討したところ、I期法よりもII期法において顎発育量は有意に大きく、さらに口蓋部骨膜の剥離範囲を縮小して骨膜を温存した vestibular flap法が最も顎発育が良好であった(Fujimoto Y et al. in press)。以上の研究成果は今後の口唇裂口蓋裂一次治療成績向上に向けた治療法確立に重要な知見を与えるものと考えられる。</p>
上記概要・成果に関連する図表等
<p>1. 術後外鼻形態の対称性に関わる被裂形態要因の解析</p> <p style="text-align: center;">Tanaka S, Fujimoto, Y et al., J Cranio-Maxillofac Surg. 49:304-311, 2021.</p>



2. 口蓋裂手術術式の違いによる顎発育への影響に関する検討

Fujimoto, Y, Tanaka S et al., Labial vestibular flap closure of the cleft palate is advantageous for maxillary development. Cleft Palate Craniofac J. in press.



当該臨床研究が「口の難病プロジェクト」に関連しているか否か下記のBOXのいずれかにチェックを付してください。(塗りつぶし可)

- 関連がある
- 関連はない